



新学習指導要領で評価が変わる！

新学習指導要領における学習評価の進め方 (小学校 外国語活動)



平成 23 年度から、小学校では新学習指導要領が全面実施となりました。新学習指導要領の趣旨を反映した学習評価の考え方については、平成 22 年 11 月に「評価規準の作成のための参考資料」が、平成 23 年 3 月には、「評価方法等の工夫改善のための参考資料」が、国立教育政策研究所教育課程研究センターから示されているところです。この「学習評価の進め方」は、新学習指導要領に基づく学習評価を円滑に進めていくための手引きとして、佐賀県教育センターが作成したものです。各学校における新学習指導要領に基づいた指導と評価を推進していくためにお役立てください。

(主な内容)

- 1 新学習指導要領の趣旨を反映した学習評価の考え方とその具体
- 2 小学校外国語活動における教科目標、評価の観点とその趣旨について
- 3 小学校外国語活動における学習評価の進め方
- 4 小学校外国語活動における学習評価事例
- 5 小学校外国語活動における学習評価の進め方 Q & A



新学習指導要領の趣旨を反映した学習評価の基本的な考え方

新学習指導要領の下での学習評価については、児童生徒の「生きる力」の育成をめざし、児童生徒の一人一人の資質や能力をより確かに育むようにするため、目標に照らしてその実現状況をみる評価（目標に準拠した評価）を着実に実施し、児童生徒一人一人の進歩の状況や教科の目標の実現状況を的確に把握し、学習指導の改善に生かすことが重要です。併せて、学習指導要領に示す内容が確実に身に付いたかどうかの評価を行うことが求められています。

各学校における学習評価の進め方と留意点

各学校においては、評価規準を適切に設定するとともに、評価方法の工夫改善を進めること、評価結果について教師同士で検討すること、実践事例を着実に継承していくこと、授業研究等を通じ教師一人一人の力量の向上を図ること等に、校長のリーダーシップの下で、学校として組織的・計画的に取り組むことが必要です。また、年間指導計画を検討する際には、それぞれの単元（題材）において、観点別学習状況の評価に係る最適な時期や方法を観点ごとに整理することが重要です。このことが、評価すべき点を見落としていないかの確認や、必要以上に評価機会を設けることによる無駄を省き、効果的・効率的な学習評価を行うことにつながります。

新学習指導要領における評価の観点について

○新学習指導要領における外国語活動の評価の観点

外国語活動における評価の観点は、他の教科とは、若干異なる考え方に基づいています。一般に、評価の4観点といわれるものは（教科によって多少異なりますが）、「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」に区分されます。しかし、教科としてではなく領域として導入された外国語活動には、これらの考え方が全て適合するわけではありません。したがって、学習指導要領の目標及び具体的な活動等に沿って、外国語活動特有の評価の観点を設定することが望ましいと考えます。

学習指導要領に示された外国語活動の目標は以下の通りです。

※丸数字は教育センターによる

外国語を通じて、

- ①言語や文化について体験的に理解を深め、
- ②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、
- ③外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しめながら、

コミュニケーション能力の素地を養う。

目標に示されているように、小学校の外国語活動では、①②③の3つの柱を踏まえた活動を統合的に体験することで、児童にコミュニケーション能力の素地を育てていくことを、そのねらいとしています。評価の観点も、この3つの柱を基に以下のように考えてはどうでしょうか。

- ①言語や文化についての体験的な理解 → ①言語や文化に関する気付き
- ②コミュニケーションを図ろうとする態度 → ②コミュニケーションへの関心・意欲・態度
- ③外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ → ③外国語への慣れ親しみ

小学校 外国語活動における目標、評価の観点及びその趣旨

1 目標

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

2 評価の観点及びその趣旨

コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に関する気付き
コミュニケーションに関心をもち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	活動で用いている外国語を聞いたり話したりしながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。	外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して、言葉の面白さや豊かさ、多様なものの見方や考え方があることなどに気付いている。

評価の観点について

評価の観点については、基本的に、平成22年5月の初等中等教育局長通知「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」（以降は「通知」と呼ぶ。）に例示された外国語活動の評価の観点を参考に設定します。ただし、学習指導要領に示された外国語活動の目標を踏まえた上で、各学校の実態に応じて観点を追加することができます。なお、外国語活動の評価の記録については、設定された観点到照して、児童の学習状況に顕著な事項がある場合に、その特徴を記入する等、児童にどのような力が付いたかを文章で記述します。



小学校 外国語活動における学習評価の進め方

どのようなことを評価するの？

※(例)は、英語ノート1 Lesson1『世界の「こんにちは」を知ろう』の評価規準文例

☆【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

児童が活動内容に関心をもち、友達や担任、ALTとのコミュニケーション活動に自ら取り組もうとしているかどうかを評価するものです。例えば、活動の中で、相手の言っていることを一生懸命に聞こうとしていたり、自分にできる方法で自分の思いなどを伝えようとしていたりするなど、人との関わりに対する積極的な姿勢を観察していきます。

(例) 挨拶のマナーを知り、名刺交換を楽しみながら、たくさんの友だちと積極的にコミュニケーションを図ろうとしている。

☆【外国語への慣れ親しみ】

様々な活動において、児童が、ある単元で触れてきた外国語の表現を聞いたり、使ったりしているかどうかを評価するものです。例えば、“Do you understand?”という問い掛けに、“Yes.”と答えたり、うなずいたりするなど、聞いて理解し反応している様子や、完全ではなくてもそれまでに触れてきた英語を使って、相手に自分のことを伝えている様子などを見ていきます。

(例) 様々な言葉で挨拶をしたり、自分の名前を英語で伝えたりしながら、友達やALTと活動している。

☆【言語や文化に関する気付き】

日本語と外国語、また、自文化と異文化の相違点や類似点などについて、児童が、自分の気付きを持っているかどうかを評価するものです。例えば、職業を表す英語表現の語尾の多くが-er、-istであることと、日本語での-家、-士という表現に共通性を見出したり、日本と欧米とのジェスチャーに関して、同じ動きでも意味が全く異なることに気付いたりする等、言葉や文化に対して、どのようなことに気付いているかを見ていきます。

(例) 世界には様々な挨拶があることを知り、挨拶を通して、自文化と異文化の違いや共通点に気付いている。

評価の方法は？

①行動観察

児童のコミュニケーション活動等を見ながら、どのような関わりをしているか、どのような反応をしているかなどを観察し評価していきます。毎時間、3つの観点から全ての児童を評価することは難しいので、時間によって評価の観点を精選したり、活動場面によって人数を限定して観察したりするなど、単元全体を通して、あるいは、学期・年間を通じて評価を網羅できればよいと考えます。単元で1枚、または、単位時間に1枚、下のような評価補助簿を作成し、評価に生かすこともできます。

＜評価補助簿の例＞

単元の評価規準を記入

(評価規準)	気付き	言葉を通しての世界のつながりに気付くとともに、日本語についての…				
	慣れ親しみ	外来語のもとになる英語表現に親しみ、担任の話す内容を推測して…				
	関心・意欲・態度	コミュニケーション活動に関心をもち、進んで友だちと関わろうとする。				
	第1時	第2時	第3時	第4時		
評価規準	音の違いに気付き、意識して聞いたり、口にしたりにしようとしている。	英語以外の言葉がもとになる外来語もたくさんあることに気付いている。	各時間の評価規準と 主な評価方法を記入			
評価方法	(行動観察、自己評価)	(発表観察、自己評価)				
佐賀 たろう	○	◎ 発表				
福岡 はなこ	◎ 進んで					
↑ 個人名 を記入	◎ (とてもよい) , ○ (よい) の評価を記入したり、特記すべき様子を短い言葉で書き留めたり、評価した方法を記号で記入したりする。					

評価補助簿への評価は、短い言葉や記号などでごく簡単に記録できるようにしたいものです。この時間にはこの観点を中心に見ていこう、この時間にはこのグループを中心に見ていこう、など評価の内容や対象を絞り、無理のない評価を心掛けましょう。評価をすることに注意が向きすぎて、指導そのものがおろそかになっては本末転倒です。チームティーチングで授業を行うことができる時間などには、単独で授業を行う場合よりも余裕をもって評価ができるような計画を立てるのもよいでしょう。

以下に、それぞれの観点について、「子どものこんな姿が見られたら」という具体的な姿を挙げています。普段から意識して、そのような子どもの姿を見ていくようにしましょう。

コミュニケーションへの 関心・意欲・態度



- ・相手の話を一生懸命に聞こうとしている。
- ・相手の話をよく聞き、うなずいたり反応したりしている。
- ・進んで友だちや担任、ALTに話しかけようとしている。
- ・相手の質問に積極的に答えようとしている。
- ・言語や非言語（アイコンタクト、表情、ジェスチャー）などを使って、自分の伝えたいことを表現しようとしている。
- ・進んで聞き返したり、質問をしたりしようとしている。
- ・活動に進んで参加し、友だちと関わることを楽しんでいる。

外国語への慣れ親しみ



- ・歌やチャンツに出てくる英語に親しみ、楽しんで口ずさんでいる。
- ・英語のリズムを感じて楽しく聞いたり、口にしたりしている。
- ・教師や音声教材の英語を聞いて、反応したり真似したりしている。
- ・まとまった話を聞いて、大まかな内容を理解し、反応している。
- ・英語の一部を聞き取って、内容を類推している。
- ・簡単な英語表現を使いながら、ゲームなどの活動を進めている。
- ・音とものを結び付けながら活動している。
- ・簡単な英語を使って、相手とのやりとりを楽しんでいる。

言語や文化に 関する気付き



- ・コミュニケーションのマナーを意識し、相手とのやりとりを楽しんでいる。
- ・世界には、様々な言語や文化があることに気付いている。
- ・様々な言語に関心をもち言葉の面白さや言語の大切さに気付いている。
- ・友だちのよさに気付き、それを認める発言をしている。
- ・自文化と異文化の違いや共通点に目を向けている。
- ・自文化や異文化のよさに気付いている。
- ・自文化や異文化のよさに気付き、それらを受け容れる気持ちをもっている。

⑥発表観察

例えば、単元の発展活動としての「紹介場面」や「発表場面」で、児童がどのように自分のことを表現しようとしているかを観察し評価していきます。その際、英語の流暢さや発音のよさなどの英語そのものの力を評価するのは適切ではなく、自分にできる方法を駆使して伝えたいことを表現している様子や、アイコンタクトを心掛けるなど関わる相手に対する積極的な態度等を評価します。

⑦制作した作品や英語ノートへの書き込み

活動の中で、個人、あるいは、グループなどで作成した作品や英語ノートへの書き込みなどで、活動への意欲を評価することもできます。また、活動時に使用したワークシートなどでの評価も可能です。

⑧自己評価 ⑨相互評価

活動のふり返しとして用いる「ふり返しカード」が中心になります。児童一人一人のポートフォリオとしてストックしていけば、自己評価の資料として用いることができます。ふり返しカードを用いる際には、まず、活動の目標に照らし合わせるなど、どんな観点で自己評価をさせるのかということ、目標に照らし、よく考えて作成しましょう。また、児童にも、どんなことをカードに記入していくのかを、十分に理解させてから取り組ませるようにしましょう。ふり返しカードに、友達について見つけた「よかったこと」などを記入する欄を設けておけば、相互評価の資料としても用いることができます。

評価基準の設定は？

評価基準については、例えば、「通知」において例示されている「コミュニケーションの関心・意欲・態度」「外国語への慣れ親しみ」「言語や文化に関する気付き」の3つの観点に沿うなどして、各学校において設定する必要があります。

また、「英語ノート」指導資料の各単元のねらいや内容を基にして、単元ごとに3観点別の評価基準を作成し、さらに、それを基に各時間の評価基準を作成していくこともできるでしょう。その際には、その時間で重点的に評価を行う観点を1つに絞るなど、効果的、効率的に評価を進め、評価のための評価に陥ることがないようにする配慮をしていくことが必要です。

○英語ノート指導資料（各Lessonの「本単元の内容」の部分）を参考にした評価基準の例

☆英語ノート2・Lesson 7「自分の1日を紹介しよう」の場合

評価の観点	評価基準の例
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	1日の生活表を作り、英語やジェスチャーなどを使って、友達と楽しみながら紹介し合うなど、進んでコミュニケーションを図ろうとしている。
外国語への慣れ親しみ	時刻や動作を表す表現を使って自分の1日を紹介したり、友達やALTの1日の生活を聞いて大まかな内容を理解したりしている。
言語や文化に関する気付き	世界には時差があることを知り、世界の広さを感じたり、他国の子どもの生活を知り、自分の生活との共通点や相違点などに気付いたりしている。

評価における留意点

- 評価においては、どの観点についても、定着を求めるものではありません。評価をするのは、児童の「関心・意欲・態度」「慣れ親しみ」「気付き」であり、よって、能力や技能(スキル)の定着状況を評価するようなことがないようにしましょう。
- 評文の文末に「～できる」という表現を使うと、できる・できないの線引きのようになり、中学校以降の外国語科教育の評価の考えになります。
→ 「～している」「～する」「～しようとしている」などの表現が望ましいでしょう。
また、目標に照らして「おおむね満足できる」状況にあるかどうかの評価を中心とします。
- 「これができていないから頑張きなさい」という捉えではなく、児童にとって英語は初めての言葉であり、“Hello!”と答えるだけでも十分にほめるに値するという見方で、形式的に、プラスの思考で評価を考えましょう。



小学校 外国語活動における評価事例 1

■ 単元全体を通しての学習評価の進め方が分かる事例

事例1の単元では、3時間の学習計画を立て、バランスよく観点別評価を行うことにしました。ここでは1単位時間に1つの評価基準を設定しています。

1 単元名 「将来の夢を紹介しよう」 【英語ノート2 Lesson 9】

2 単元目標

職業を表す表現に親しみ、言葉についての関心を高めると共に、進んで自分の将来の夢について紹介したり、友だちの夢を聞き取ったりしようとする。

3 単元の評価規準

コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に関する 気付き
積極的に自分の将来の夢について紹介しようとしたり、友だちの夢を聞き取ろうとしたりしている。	職業を表す表現や職業を尋ねる表現を聞いて、その内容を理解したり、それらを使ってコミュニケーション活動を行ったりしている。	英語での職業の言い方について知り、日本語との違いや共通点に気付いたり、世界の子どもたちも、自分たちと同じように将来に夢を描いてることに気付いたりしている。

4 単元の指導と評価の計画（3時間）

目標・活動	関	慣	気	評価の方法の具体と自己評価カードの評価項目例文
第1時 様々な職業の英語表現に慣れ親しむ。 ○ Who am I? クイズで、様々な職業の英語表現に触れる。 ○ キーワードゲームなどで、職業の英語表現に慣れ親しむ。			○	行動観察 英語やジェスチャーのヒントを与え、何の職業かを推測させることにより、自分にできる方法で答えている様子を観察する。また、ゲームの中で、楽しみながら自然に職業を表す英語表現を使っている様子を観察する。 自己評価カードの評価項目(例文) 英語やジェスチャーを使って先生の質問に答えたり、ゲームの中で職業の名前を英語で言ってみたりしましたか。
第2時 外国の子どもたちも、自分たちと同じように将来の夢を描いていることを知る。 ○ Let's Listen の内容を基に、外国の子どもたちの夢について知ったり、A L T の国の子どもたちが憧れる職業のランキングを予想したりする。			○	発表観察 外国の子どもたちの夢についての話題から、活動中、また、ふり返りの場で、自分たちとの相違点や類似点に関する気付き、それぞれのよさに目を向けた気付きなど、発言の内容を聞き取って評価する。 自己評価カードの評価項目(例文) 外国の子どもたちの夢について、自分と比べて気付いたこと（似てるな、違うな）や、こんなところがいいな・おもしろいなと思ったことを書いてみましょう。＜記述式＞
第3時 将来の夢の紹介カードを作り、友だちに将来の夢を伝えたり、友だちの夢を聞いたりする。 ○ インタビューゲームで、自分にできる方法を使いながら、友だちと将来の夢を伝え合う。			○	行動観察、発表観察 作成したカードを提示しながら、使える英語表現やジェスチャーなどを用いて、自分の夢やその理由を相手に何とかして伝えようとしていたり、相手の言うことを一生懸命に聞こうとしている様子を評価する。表現の正確さでなく、自分から進んで関わろうとする姿勢を見る。 自己評価カードの評価項目(例文) 自分の夢について友だちに進んで紹介したり、友だちの夢を聞いたりするを楽しみましたか。

小学校 外国語活動における評価事例 2

■ 「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」の評価の進め方が分かる事例

英語ノート2「友だちの誕生日を知ろう」の単元において、言語や非言語など自分にできる方法で、担任や友だちとの関わりを楽しむ活動を展開する場合の評価方法について示します。

単元名 「友だちの誕生日を知ろう」 【英語ノート2 Lesson3】

本単元は、3時間扱いの計画です。1時目は、ゲームなどの活動を通して、月名を表す英語表現や誕生日を尋ねる質問表現に慣れ親しませ、本時である2時目では、それらを聞いたり使ったりしながら担任や友だちとのコミュニケーションを楽しむ活動を行います。3時目は、コミュニケーション活動に文化理解の内容を絡めて、自文化・異文化への気付きをもたせます。

1 本時の目標（2／3）

- 聞いたり伝えたりするコミュニケーション活動に興味をもち、友達や担任、ALTと積極的に関わろうとする。

2 本時に位置付けた評価規準

- 英語表現や身振りなどを使いながら、積極的に担任や友だちとのやりとりを楽しんでいる。

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

3 本時の指導と評価のポイント

※ゴシック部分の活動について観察し、評価する

活動内容	評価の具体とポイント
1 ♪ 12months song を歌う。 2 担任のヒントを聞いたり見たりして、クイズを楽しみながら、前時で触れた表現に再度触れる。 3 ゲームのルールを聞いて、友だちと「情報交換ゲーム」を行う。 4 ゲームで分かったことを、みんなで共有する。 5 活動のふり返しをする。	行動観察（2および3の活動において） まずは、どちらの活動においても、積極的に参加しようとしているか、つまり、担任のヒントを熱心に聞いて答えようとしていたり、自分から友だちに声を掛けて関わったりしているかを観察する。そして、3のように、児童が自由に相手と関わる活動では、より細かに活動を観察し、自分なりの表現を工夫して楽しんでいる場面や、友だちと協力して活動している場面などを見出し、評価補助簿に記入すると共に、その場でほめたり励ましたりする。 ※ふり返しについては、発表観察と自己評価カードで評価（下欄参照）

＜児童aの自己評価カードの一部＞

- ジェスチャーや英語などを使いながら友だちに情報を伝えたり、友だちからの情報を聞いたりしましたか。

(>_<) (1 2 3 (4)) (^o^)

- 今日の活動で、自分のよかったことや気付きを書きましょう。

いろんな友達と じょうほうを ころかんして、とても楽しかったです。とちゅうで、英語が 思いのほか なかったときは、ジェスチャーで 言ったら 分かってもらえたので、よかったです。

自己評価カードの項目は、その時間の評価規準をできるだけ具体的に示した形で示します。また、記述させる前に、活動で良かった点をほめたり、振り返りで考えさせたいことについて触れたりすると、より具体的な評価ができます。児童の記述の中で、評価のポイントになるような部分は、特にしっかりチェックしましょう。



小学校 外国語活動における評価に関するQ&A

Q1 外国語活動の目標にある「コミュニケーション能力の素地」とは、具体的にどのように捉えたらよいのでしょうか？

「コミュニケーション能力の素地」とは、小学校段階で外国語活動を通して養われる、言語や文化についての体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみを指したものです。

人が相手とコミュニケーションを図る際には、音声として表れる言葉だけでなく、無意識に身振り手振り（ジェスチャー）、顔の表情、視線などの非言語メッセージを、同時に発信しながら意志を伝えようとする人が多いものです。また、人と人とのコミュニケーションは、相手の話を聞きたい、相手に自分のことを伝えたいという思い、つまり、相手とコミュニケーションを図りたいという気持ちがない限り、いくら話す技術（スキル）を磨き、語彙を増やしたりしたとしても、相手との意思相通や相互理解はうまくいかないのではないのでしょうか。

外国語活動では、言語・非言語を含めたコミュニケーションの手段の「素地」と、他者と積極的に関わろうとする情意的な面の「素地」を、活動を通して児童の中に育てていくことをねらいとしています。評価においても、この外国語活動の目標を十分に理解した上で、評価規準の設定を行っていくことが大切です。

Q2 指導要録や通知表への評文の記入では、どのようなことに配慮すればよいのでしょうか？

外国語活動の評価は、評定をつけるものではなく、あくまでも文書表記です。ですから、児童それぞれについて特徴的な点を明記する必要があります。そこで、評価の際に注意することは以下の通りです。

まず、1つ目は、他の児童と比較して評価するのではなく、その児童自身の資質・能力（主として、態度・意欲面）が、外国語活動によってどのように向上したかを表記します。人との関わりに消極的で、普段、声がなかなか出せない児童でも、外国語活動を通して、その児童なりに少し声を出せたという場面が見られたら、そこを見落とすことなく評価することが必要です。教師が作成した評価規準に照らし、一人一人の児童の現状を考慮して、児童がどれほど成長したかを評価していきます。つまり、その児童の形成的評価として、次につながる評価とすることが大切なのです。

2つ目は、児童のための評価、つまり、児童が「もっと人との関わりを楽しもう」と思える評価にすることです。関わりの中でよかったことをきちんと褒め、コミュニケーションに対して前向きになれるような文言の評価にすることです。そのために文言を精査する必要があります。

3つ目は、保護者への連絡を兼ねる通知表の評価についてです。ややもすると、通知表の文言が、教師にしか分からない抽象的な文言になっている場合や、例えば、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」という観点の表示の欄に「○」がついているだけの通知表を目にすることがよくあります。これでは正確に子どもの評価が伝わっているとは言えないと思います。コミュニケーション活動について、優れている点を、できるだけ具体的な分かりやすい文言で書いていく必要があります。

この手引きは、国立教育政策研究所で公開されている「評価規準等の工夫改善のための参考資料」（小学校）などを参考にして、作成しています。以下のURLをご参照ください。

<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/shidousiryoku.html>